

Regional Applications and Nexus of the Ocean Health Index

「オーシャン・ヘルス・インデックス」を用いた 地域アセスメントの可能性について

日時：2015年7月1日－2日（1日：国際シンポジウム、2日：専門家ワークショップ）
場所：東京大学大学院農学生命科学研究科 フードサイエンス棟
中島ホール（シンポジウム）及び会議室（専門家ワークショップ）
主催：東京大学海洋アライアンス、コンサベーション・インターナショナル
科学研究費補助金 新学術領域研究「新海洋像：その機能と持続的利用（NEOPS）」
助成：日本財団

プログラム：

モデレーター：名取 洋司（CI ジャパン 生態系政策マネージャー）

9:30 - 9:40 開会挨拶 古谷 研（東京大学理事・副学長）

9:40 - 10:00 基調講演 1 『海洋生態系サービスに関する NEOPS の研究成果』
齊藤 宏明（東京大学大気海洋研究所 准教授）

10:00 - 10:30 基調講演 2 『海洋生態系サービスの価値に関する一般認識』
ロバート・ブラジック（東京大学農学生命科学研究科 特任研究員）

10:30 - 11:00 基調講演 3 『「里海」の概念について：現在および将来の可能性と課題』
あん・まくどなど（上智大学地球環境学研究科 教授）

11:00 - 11:30 基調講演 4 『里海再生に向けた多様な主体との協働 - 瀬戸内海の事例から』
田中 丈裕（NPO 法人里海づくり研究会 事務局長）

11:30 - 12:00 基調講演 5

『モルディブにおける海とサンゴ礁の生態系サービスの利用とその持続可能性：将来への課題』
フセイン・シナン（モルディブ共和国農水省水産管理課長）
アハメッド・リヤズ・ジャウハリー（海洋研究センター上席研究員（モルディブ政府代表））

12:00 - 13:00 昼食

13:00 - 13:35 基調講演 6

『生態系サービスの供給とシースケープにおける人間の福利のつながり』
クリス・ゴールデン（ハーバード大学公衆衛生大学院環境保健学科 研究員）

13:35 - 14:20 基調講演 7『オーシャン・ヘルス・インデックス（海洋健全度指数：OHI）の地球規模、地域別および公海におけるアセスメント』

エリック・パチェコ（CI 科学海洋センター、オーシャン・ヘルス・インデックス、シニアマネージャー）

14:20 - 16:20 パネルディスカッション

モデレーター：八木 信行（東京大学大学院農学生命科学研究科 准教授）

<パネリスト>

クリス・ゴールドデン（ハーバード大学公衆衛生大学院環境保健学科 研究員）

エリック・パチェコ（CI 科学海洋センター、オーシャン・ヘルス・インデックス、シニアマネージャー）

奥田 直久（環境省自然環境局 生物多様性地球戦略企画室長）

田中 丈裕（NPO 法人里海づくり研究会 事務局長）

イヴォーン・ユウ（国連大学サステイナビリティ高等研究所研究員/東京大学）

16:20 - 16:25 閉会挨拶 日比 保史（CI バイスプレジデント/CI ジャパン代表理事）

趣旨：

地球規模で変化する海洋環境を評価する試みとして様々な手法が開発されている中で、「オーシャン・ヘルス・インデックス(海洋健全度指数:OHI)」は、世界で 65 名を超える科学者および海洋専門家が関わり、人と海の関係（生態系サービス）を総合的に定量評価し、政策提言を行うユニークな取り組みである。100 以上の世界規模のデータセットを駆使し、海に面する世界 221 の地域や国および外洋域において、海の健全性に関する 10 の「目標」（①食糧供給、②零細漁業の可能性、③海洋生産物、④炭素貯蔵量、⑤海岸保護、⑥生計手段および経済、⑦観光およびレクリエーション、⑧場所のイメージ、⑨きれいな水、⑩生物多様性）に関して、持続的な状態を 100 点とし、それぞれの目標および総合点を 0～100 点のスコアで毎年評価が行われている。一方で、統計データに表れない現場の事情を反映したボトムアップの地域アセスメントが、ブラジルやフィジーなどで始まっている。今回のシンポジウムでは、日本のいわゆる「里海」と呼ばれる沿岸地域において、様々な主体が一緒になって海の健全性、あるいは恵みを評価するために、OHI という指標がいかに活用できるか、またさらにどういった視点を盛り込んでいく必要があるのか、これまでの研究成果や里海の現状を踏まえ、幅広い視点から議論を行い、専門家ワークショップでさらにその議論を深めることを目的とした。

概要：

2015年7月1日に開催された国際シンポジウムには、学生、研究者、省庁、企業、NGO、メディアなど、国内外から70名を超える参加を得て、広く人と海の関係性の評価について、多様な視点から活発な議論が繰り広げられた。

古谷研教授（東京大学理事兼副学長）による開会挨拶および海洋アライアンスの紹介、ならびに日本財団への謝辞等に続き、7名の基調講演が行われた。海洋の物質循環や生態系機能に関する最新の海洋学的知見に基づいて海を区分けし、海洋生態系サービスを持続的に利用していくためのガバナンスのあり方を探求することを目的に実施されている研究について、齊藤宏明准教授（東京大学大気海洋研究所）より研究成果が報告された。ロバート・ブラジック氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）から、海洋生態系サービスの価値に関する一般認識について、日本及び米国で実施したアンケートの調査結果を紹介があった。続いて、あん・まくどなど教授（上智大学大学院地球環境学研究科）から、全国各地の沿岸コミュニティにおける様々な事例をもとに、日本の里海と呼ばれる沿岸地域の現状と課題について、ローカルとグローバル両方の視点からの発表があり、それを受け、田中丈裕氏（NPO 法人里海づくり研究会）からは、岡山県日生町での多様な主体の協働による「アマモトとカキの里海」再生について、長年の現場経験を踏まえお話いただいた。海洋生態系サービスへの依存度が高く、その持続可能な利用が必須の課題となっているモルディブからは、フセイン・シナン氏（モルディブ漁業農業省）およびアハメッド・リヤズ・ジャウハリー氏（モルディブ漁業農業省海洋研究センター）の両氏から、同国の沿岸漁業管理の取組みに関して紹介があった。クリス・ゴールドデン氏（ハーバード公衆衛生大学院）は、栄養学的視点から見た漁業の重要性およびそれに影響をもたらさる地球環境の変化について検証する研究プロジェクトについての紹介を行い、最後にエリック・パチェコ氏（コンサベーション・インターナショナル）からは、本シンポジウムの中心的テーマであるオーシャン・ヘルス・インデックスについて、その概要とこれまでの成果、課題、可能性について説明があった。

基調講演に続き、八木信行准教授（東京大学大学院農学生命科学研究科）のファシリテートのもと、パネルディスカッションが行われた。ディスカッションに先立ち、奥田直久氏（環境省生物多様性地球戦略企画室）およびイヴォーン・ユー氏（国連大学サステナビリティ高等研究所）から、生物多様性や生態系の状態を図る指標策定に関する環境省の取組みと、石川県能登半島の里山・里海に関する国連大学を中心とした取組みについてそれぞれ紹介いただいた。パネルディスカッションでは、立場の異なるパネリスト同士、また会場からも、活発な質問や意見が飛び交った。

以上の議論を通じて、国レベルでの評価から始まったオーシャン・ヘルス・インデックスが、地域レベルのアセスメントを実施する上で有効かどうかについての議論は収束しなかったものの、各ステークホルダーが自分たちの海の現状について評価しようというプロセ

スそのものが、立場を超えた多様な主体による協働や各種の合意形成を生むきっかけになるのではないかという共通認識が生まれたほか、社会科学と自然科学の両方の視点を併せ持つこと、活動の持続性を担保する現場のリーダーの重要性など、多くの重要なポイントが抽出された。

また、翌日の専門家ワークショップは、限定したメンバーが参加し更に分野横断的な議論を深める場として開催した。ここでは、前日の議論の内容を総括した上で、今後の関係各機関の研究協力などについて更に議論を行い、調査課題の抽出、研究体制の構築などを行った。

以上、今回開催したシンポジウムおよび専門家ワークショップは、海洋アライアンスが目指す分野や組織を超えた新しい研究活動の推進に寄与する会議であり、海洋と人類の新しい親和的・協調的な関係を築くための議論が国際的にも進んだという点で、海洋アライアンスへの貢献を行うことができたと考えられる。



活発な議論が行われた会場の様子